

学会ニュース

日本女性学会

第20号 1984年8月

目 次

◦ 幹事会だより（選挙に関して）	2
◦ シンポジウム「女性と宗教」	
フェミニズムとキリスト教の関係について……エリザベート・ゴスマン	3
女性解放と宗教批判田川建三	8
女性の視点で仏教を考える源 淳子	15
◦ 女性と宗教・両性具有性あれこれ浅野美和子	19
◦ 寄贈図書・資料	23
◦ 新入会員紹介	23
◦ お知らせ	23
◦ 編集後記	24

◎ 幹事会だより

去る8月6日午後1時半より開かれた幹事会では、懸案の幹事改選に関する問題が話し合われ、以下のことが決定されました。

選挙に関する内規

1. 選挙人資格について 選挙人資格は、会員名簿に記載されている者とする。
 2. 被選人資格について 被選挙人は、会員名簿に記載されている者とする。
(※従って、会員は選挙人であると同時に、候補者でもあります。)
 3. 幹事の定数 15名。
全員改選とする。
 4. 選挙方法 1984年8月6日までに会員となった者を、1984年度の会員名簿に記載する。
この名簿をもとに、投票用紙を作製し、15名連記(推せん者に○印を付す)
し、返信用封筒で事務局へ送付する。連記する場合、16名以上の氏名を記入
した場合は投票を無効とみなし、15名以下の氏名を記入した場合は、何名記
入されていても記入されている者全て有効とみなす。
 5. 選挙の告示および投票期日 1984年8月末日付で会員名簿と投票用紙および、返信用封筒
を各会員に発送することをもって、選挙の告示とする。
投票期日は同年9月30日(日)(当日消印有効)とする。
 6. 選挙結果と当選者の決定 1984年10月13日(土)に、選挙管理委員会を開催し、開票する。
同得点者が出了場合は、選挙管理委員会が責任をもって、当選者の決定を行
なうものとする。
選挙結果と当選者(新幹事)の発表は、開票後の最も早い時期に発行される
「学会ニュース」の紙面で行なうものとする。
 7. 選挙管理委員会 現幹事会が代行するものとする。
 8. 新幹事の任期について 1986年中に開催される総会までとする。
(現幹事と新幹事の会務引き継ぎは、1984年12月中に行なうもの
とする。)
 9. その他 この内規は、今回の選挙に限り有効とする。
- ※ 前号でお送りした会員名簿作製のための葉書を返送されていない方は、至急お送り下さい。
また、所属欄へは職業もお書きそえ下さい。

フェミニズムとキリスト教の関係について

エリザベート・ゴスマン

現代社会におけるフェミニズムについての意見は、いろいろあります。フェミニズムとキリスト教の間に関係がないと思う人もいるし、まだキリスト教の信仰は本質的に女性を大切にするという人もいます。

私の専門は中世のスコラ哲学（神学）であるから、30年ほど前からスコラ哲学における人間像について研究し、2、3年前から中世の女性の神秘主義者といわれる学者とか神学者について研究しています。彼女たちが、その神秘主義的作品の中で、同時代の男性の学者による女性像をいろいろな意味で書き直そうとしていたことを、私は最近発見しました。ですから、今までよく知られていた中世時代のヨーロッパにおける女性運動は、実際的運動だけではなく、それを可能にする理論もあったということが、だんだん出てくるのです。この理論を作ったのはもちろん女性たちでした。現代社会におけるフェミニズムもそうです。：女性によって創られた理論があります。

しかし、中世の女性運動とは違って、その理論の大きな部分はキリスト教から発生しなくなっています。つまり、1960年代からアメリカ、ヨーロッパにおける新しいフェミニズムの“Women's Rights Movement”という派の中に、キリスト教からの影響はまだいくらかみられ、そのメンバーたちも多勢の場合、プロテstantとカトリックの信者であるといってもいいです。しかし、“Women's Liberation Movement”という新しい派の女性たちは、キリスト教が本質的に封建的であり、キリスト教内における女性がいつまでも従属的地位に、男性が支配的地位におかれていることを考へているので、1960年代からそのメンバーたちの間にキリスト教をやめた人が多いのです。“Women's Rights Movement”は、19世紀からの第1の女性運動の続を意味し、民主主義の政治組織を基礎にして、女性を教育、職業の権利、政治的権利のために闘ってきました。プロテstantとカトリック教会との協力もありました。

しかし、“Women's Liberation Movement”というのは最もラディカルな考えをもち、家族、結婚、教会、社会のいろいろな組織などは封建的であり、女性を抑圧するといって男性から離れて、女性だけの文化を創るという目的をもっているのです。ドイツの“Autonome Frauenbewegung”は、男性から独立した女性運動であり、自分自身についての法律とか生活秩序を作りたいというのです。家父長制度が完全に克服されたときまで、男性と一緒に活躍したくない

いうことになっています。女性は女性を大切にし、女性を助け、男性への愛のために他の女性にジェラシーをもつことなしに自分の、戦争のない、自然を大事にする道徳上のユートピアを作っているのです。

キリスト教は、特に資本主義とのつながりのために、『Women's Liberation Movement』によって強く批判されながら、共産主義の諸国もその封建的政治秩序のために、またフェミニズムの運動を許せないために厳しく批判されています。——男性の今までの政治活動、経済政策などに反対して、『Women's Liberation Movement』は搾取されているあらゆるグループの解放と共に、女性の独立を目的としているのです。しかし、キリスト教との協力を全然考えていません。こうした分裂、すなわちキリスト教に対する態度の違いは、女性の間の連帯性を妨げる悲しむべき事実です。

キリスト教内におけるフェミニズムは、よく『フェミニスト神学』といわれ、つまり、それは1960年代からアメリカで出来たキリスト教内における女性運動を意味するのです。特にラテンアメリカと関連している解放神学の一つのタイプであり、福音を新しく解釈し、それを実際生活にあてはめようとしています。つまり、福音がいう人間の救済というものは、この世に生きている間に始まるので、人間の解放についてのメッセージであるといわれています。このことによって、父制的な社会秩序に反対し、社会状態をよりよくするのは、あらゆる解放神学の出発点であるといってよろしいです。

ヨーロッパの場合も、1960年代、特にカトリック教会のヴァチカンの第2の公会議前後から女性神学という動きがあります。そして、ヨーロッパの女性たちは、アメリカの女性たちよりも10年ほど早く神学を勉強するように許されていたのです。ヨーロッパの女性の神学者たちは、1960年前後から出版物や講演などで、聖書を正しく解釈するように頑張りました。すなわち、ユダヤ教／キリスト教の聖書は全ての家父長時代において創立された宗教と一緒に、その封建的な影響を受けているということに、我々は気が付きました。その封建的影響と、聖書がいう人間の救済とを別々にする必要があることを認識し、聖書の家父長主義的観念が、まるであらゆる時代を超越する法則力をもつかのような考え方には、我々は強く反対しています。

しかし、アメリカの女性たちは、そのときにまだ神学を研究するのは不可能でしたから、ヨーロッパで出来た、こうした問題についての出版物をまだ受け入れていなかったのです。その結果、『Women's Liberation Movement』がいうこと（すなわち、キリスト教の神が家父長制度を正当化し、また、キリスト教の生活秩序が男女の上下関係をいつまでも道徳的なものにすること）をそのまま信じ、自分の解放を可能にするために、多勢の場合、教会を出たという事実があります。

そして、1960年代の半ばごろから、アメリカの女性たちも神学を学んできて、男性による神学をいろいろな点で批判しています。このアメリカの女性神学者のある部分もまた、教会が余りにも女性を差別するという理由で教会を出たわけです。こうした "Post Christian Feminists" の一番有名なのは、Mary Dalyです。

ヨーロッパにおいては、信仰をやめないで教会を去る女性の運動家たちもいます。それは例えば、教会が平和運動に余り参加しないことに反対するようなデモストレーションを意味しているといってもいいです。ドイツで40才ぐらいまでの人々は、そういうことをします。けれども、私たち50才以上の人々にとっては"ナチ"時代の経験があるから、教会をやめるのは裏切り行為であるように見えます。なぜかというと、キリスト教の精神を根本にして、"ナチ"の政府に反対したために殉教者になった信者の数が多く、その殉教者たちのために我々は教会をやめることができません。

アメリカ、ヨーロッパにおける教会に残りたい女性たちは、キリスト教の伝統は新たに研究する義務を強く感じているのです。つまり、一番最初のイエス運動 (Jesus Movement) にみられる人間関係；また、初期キリスト教、中世のスコラ哲学の人間像などです。その中にみられる反フェミニスト的な考え方は、いつ、どこでキリスト教に入ってきたかどうかという問題についての研究は、話題になっているのです。こうした神学における女性学は、キリスト教の女性運動にいろいろなインスピレーションを与えるといってもいいです。

これから私は、去年アメリカで出版されたフェミニスト神学の書物を紹介したいと思います。著者はドイツ人の Elisabeth Schüssler Fiorenze です。

In Memory of Her. A Feminist Theological Reconstruction of Christian Origin,
New York (Crossroad) 1983.

キリスト教の一番最初の状態を復元するために、Elisabeth Schüssler は福音書にみられる男女の平等性についての歌集をそのモデルとして、家父長制度はいつ、どこで新約聖書に入ってきた、ということについて、詳しく説明するのです。

他の同時代の宗教的運動とは異って、このイエス運動は "not primarily holiness but wholeness" をもたらしたというのは、この著者の命題であるといってもいいです。神の国を実現することを目的としたイエス運動は、貧しい人、罪人、女郎などとの協同体であったために、聖人でないと思われていた人々の平等性を認め、その人々の傷つけられた品位を直すような動きでした。同時代の社会において、差別された人々を大切にするという点にその特徴があるのです。イエスの、女性の生活についての譬え話、また女性の病気を治すことによって、同じことが言えると思います。すなわち、イエスは "make women whole" という目的をもっていたことは明らか

かになります。

そして、イエスの一番最初の男女の弟子たちの平等性（discipleship of equals）というの は、疑いのないものであるといつてもいいです。他のフェミニスト神学者たちとともに Elisabeth Schüssler はマルコの第7章とヨハネの第4章に出てくる白フェニキアの女性やサマリアの 女性とイエスとの dialog を非常に大切にし、この女性たちと話しながら、イエスは自分の召し 出しがユダヤ人のためだけではなく、異教徒のためにもあるということを初めて意識したとい うのです。その結果、このイエス運動は、イスラエル人以外の人々をも含むようになったことが言える のです。

特に二つのイエスの御言葉、すなわち、MaHh, 23, 9 ; マルコ 3, 36 は、神だけが父であ り、イエスの弟子たちは兄弟、姉妹、母のようにイエスによって愛されることを、はっきりして いるのです。それは社会内における父権的構造を否定する意味をもっているようになります。

“Insofar as the new ‘family’ of Jesus has no room for fathers, it implicitly rejects their power and status and thus Claims that in the messianic community all patriarchal powers are abolished.” (147頁)

また、初期キリスト教の布教運動をみると、新約聖書の使徒行録によると、“home Churches” すなわち、人の家で集まる教会を主導するものの間には、女性が多いということがよく 分ります。パウロの書簡の中に、女性の協力者の名前もよく出てくることは明らかです。この女 性たちは、Elisabeth Schüssler によると、ただ下の段階である “helpers” だけではなく、一 番最初のかたちでの聖職をもっていたということです。例えば、ローマ書の第12章に出てくる Phoibe はギリシア語の原文によると *diakoros* (diakonos) です。この言葉は聖職者を意味して いるのです。けれども、聖書のいろいろな翻訳をみると、Phoibe の場合、それは隠されています。“Kenchreae の教会に仕える Phoibe” のような翻訳はよくあります。特にカトリックの翻 訳者は聖職者である女性のことを考えることが出来ないのです。というのは、あとで出来たカト リック教会の男性だけの聖職を根本にして、それをパウロの書簡にあてはめようとしているので す。

Rom 16, 7 に出てくる Andronikos と Yunias という使徒たち (apostle) の一人は、女性 の Yunia であることとも考えられます。というのは、新約聖書に出てくる12人の使徒と別の “apo stle” もいたし、その中に女性もいたようにみえるのです。パウロ自身も、この12人の使徒に 属さなくても “apostle” である自己意識をもっていたことは確かです。ですから、初期キリスト教の布教運動にもイエス運動と同じように “discipleship of equals” が存在したとい うことは確かです。ただ、新約聖書が書かれたときに、ヘレニズム文明であったために、その書き方と

だは、こわばり、息がつまりそうになっていたり、異性と触れ合うことに拒否反応をおこしていることが多い。又、母親のイメージにつながっていく出産や月経に恐怖や嫌悪感を抱いていることが多い。

女にとって<無名>への道は、他人や共同性との親和と、からだとの親和のいずれかが欠けても、うまくいかないようである。

<6月11日分科会発表>

女性解放と体育・スポーツ

—— Mason: "On the utility of exercise"(1827)——

大河内 保 雪

現代の学校教育では、教育の機会均等が憲法で保証されているにもかかわらず、中等教育における「体育」には性差別による教育が依然としてすすめられている。男女の特性論にもとづき、「男子は体育、女子は家庭」の教育カリキュラムは、明らかに性差別の典型である。また、社会における女性スポーツは、確かに19世紀に比較すれば、20世紀に入り今日まで活発になっている。しかし、現在の女性スポーツは、マスコミ先行のセックスアピールを強調した女性スポーツ、技術の高度化に伴なう低年齢化した女性競技スポーツなど、数多くの問題を含んでいる。このような女性の体育、スポーツにかかわる問題の解決は、女性解放の視点から体育、スポーツを再検討することによって達成される。この研究は、そのためのささやかな一試論である。

そこで、この研究では、女性の手によってはじめて書かれた女子体育書に着目し、女子体育書の内容分析と後代に与えた影響を体育史的立場で検討することにより、女性解放と体育、スポーツのかかわりについて明らかにした。

産業革命を最も早く迎えたイギリスは、19世紀初頭において近代資本主義社会が形成され、綿工業、織物工業を基軸とする技術革新が進み、ほぼ1830年までに各産業部門における工場制度が成立した。このような産業社会において、女性は、家事労働だけでなく、工場労働の生産力として社会に連れ出された。そして、女性は、安い賃金労働として資本主義社会の底辺を支えていた。また、19世紀初頭のイギリスにおいて、いわゆる寄宿学校こそが少女たちにとって組織的教育の唯一の場であった。そこで教育は、上流階級の娘と新興階級に属する娘達に行なわれたものであった。そこで学校生活は、少女達の健康をそこなう悲惨なものであった。

Mrs Marian Masonは、イギリスにおける最初の女子体育指導者である。女性の身体的欠

陥の治療や防止、優美で上品な運動のすすめは、女性の身体への自覚を促進し、体育、スポーツにおける女性解放の一歩として位置づけられる。また、Mis Masonは、最近の女子体育指導者として、職業による女性の社会的進出として意義づけられる。

Mis Masonの使用した "Calisthenics" の言葉は、女性の独自な身体運動の領域を確立した。結果的には、男性のGymnastics、女性のCalisthenicsとして対立的に並べられ、必ずしも女性の体育、スポーツ促進に有利に展開しなかった。しかし、女性に身体運動が禁止されていた時代に、概念としての女性の身体運動を意味するCalisthenicsを定着させたことは、注目される。

Calisthenicsは、イギリスはもとよりアメリカにおいても活発に行なわれた。そして、Beecherの女子体育活動にみられるように、女性解放運動とも明確に結びついていた。Calisthenicsの実施により、女性の身体運動参加の機会は拡大し、女子学校体育の成立に寄与した。しかし、日本の場合には、単なる運動の一領域としてしか導入されず、Calisthenicsの影響により女性の身体運動がどのように発展し、日本の女性解放とどのように結びついていたかは明らかでない。

このように Mis Masonの著書やCalisthenicsについて検討した結果から、女性の体育スポーツがますます盛んになりつつある今日において、女性解放と体育、スポーツの関連は、女性自身が体育、スポーツに対してどのように主体的に取り組むかという立場から、残された問題について今後検討されなければならない。

<6月11日分科会発表>

第5回全米女性学会に参加して

田中和子

(1)

全米女性学会の第5回年次総会が、去る6月26日から30日までの5日間、オハイオ州コロンバス市のオハイオ州立大学で開催された。今年の主題は「フェミニスト教育：質と平等」。およそ2000人にのぼる参加者が、女性学教育の向上と平等実現をめざして、活発に意見を交換した。

まず、学会の主軸となった全体会議の模様を、プログラムにそって紹介しておこう。

1. 開会式（6月26日）

- 女性学に対する右翼の攻撃 — ロングビーチでのできごと
- 基調公演 — 飛躍のうちに：フェミニズムと80年代の懸念

2. 女性学の未来を展望する — 自律・統合・変革・革命（6月27日）

- 自律=統合論争の起源
- 共に作業を紡ぎ合う
- 小規模単科大学における統合の可能性 — 概念とごまかしの問題
- 少数民族研究と女性学 — 夢を殺したいのか
- 統合派および自律派戦略の政治学
- 女性学を現代知識革命の中心に据える

3. 女性運動における人種差別と反ユダヤ主義（6月28日）

- 人種差別の隠れた正体を明らかにする — アラブ系アメリカ人の窮状
- もはや仮面はいらない — ユダヤ人嫌悪としての反ユダヤ主義
- アイデンティティ — 肌・血・心
- 帝国主義から産業主義にわたる人種差別
- 岩と硬地 — 黒人女性とユダヤ系女性の関係

4. 國際的な貧困の女性化（6月29日）

- 経済の再構築 — 女性は滞まり続けることができるか
- 女性の労働と教育における矛盾 — エジプト、インド、インドネシアの場合
- 変化の中のラテンアメリカ女性 — プエルトリコ、チリ、エルサルバドルの場合
- 国際的フェミニズムの視野を導入する — 合衆国女性にとって国際的な貧困の女性化が意味するもの

第一の立場の主要関心事は宗教であり、宗教の中に女性解放を取り込もうとする。第二の立場の主要関心事は女性解放であり、その過程で宗教を克服していく。

今日のシンポジウムの他のお二人の発題者は、典型的に第一の立場に立つ人である。けれども、今のところこの二つの立場の間で衝突し、争ってみても、あまり実のある結果は得られまい。必要なことは女性の解放を全体的に実現することであって、宗教をめぐって統一見解を樹立することではない。第一の立場の人達も、少なくとも宗教の世界においては、女性差別を克服するために多大の努力をしている。しかもそれはしばしば、社会の他の部分においてよりも、より一層多くの努力を必要とする。宗教の世界は、多くの場合、社会的には非常に後進的であって、従って、そこで女性解放のために努力するのは、社会の他の場所で同じ努力をするよりもよほど多くのエネルギーと決断を要求されるのである。だから我々は、第一の立場にあるこれらの姉妹達と基本的に連帯すべきであって、宗教に関する視点の相違をめぐって衝突していても仕方がないだろう、と思う。ただし、我々が連帯すべきは女性解放においてであって、宗教においてではない。

しかし、とりあえずここでは、この種の護教論とつきあってみよう。たとえば例の有名なマルタとマリアの話である（ルカ福音書10, 38-42）。この話を次のように作り変えて、「説教」として語ってみたらどうだろうか。

——ある時イエスはベタニアの村のマルタとマリアの家を訪れた。炎天下を歩いて来たので、のどが渴き、そのまま台所に上がりこんで水を飲んだ。ついでにつまみ食いをしながら、そこで夕食の準備をして働いていたマルタの手伝いを始めた。マリアの方はイエスから精神的なお話をうかがいたいと、よそ行きに着がえて客間で待っていたのだが、ちっともイエスが現れないで、しごれを切らして台所に行ってみると、こともあろうにイエスは皿洗いをしながらマルタと雑談しているではないか。マリアは言った、「せっかくイエス様がおいでになったのに台所の手伝いをさせるなんて、マルタは何とひどい人なんでしょう。イエス様、早くこちらにおいでになって、神さまのことをお話しして下さい。」イエスは答えてマリアに言った、「マリア、マリア。世の中になくてはならないものは多くはない。マルタはその良いものの方を選んだのだ。」——

私自身の問題意識にあわせてこの物語を作り変えれば、たとえばこういうことになる。けれども、こう作りえたのではルカ福音書の話とは正反対の意味になる、ということを私は当然自覚している。むしろ私は、ルカ福音書の宗教性はこのように逆転して批判されなければならない、と明白に主張する。ところが護教論者の場合は、自分達が作りえた作り話を、これこそが聖書の物語の本意だ、と主張する。護教論とは、いわば、このような改竄の歴史なのだ。この場合、護教論者の言っていることの方が聖書の趣旨よりも正しい、ということはしばしばありうる。しかし、だからとて護教論が正しいわけではない。出発点においてこのような嘘があれば、自分達

の主張がいかに正しくても、その嘘に規定されて、どこかでゆがんでしまうのである。たとえ自分達の經典に書いてあることであろうとも、正しくない主張を十分に批判的に解体しておかないと、結局いつまでも後をひくことになる。

周知のように、ルカ福音書のこの話の趣旨は上の私の作り話とは正反対である。イエスはマリアのところに座って宗教的な説教に専念している。台所仕事で忙しいマルタが、妹のマリアも台所仕事を手伝うように、と言いに来ると、イエスがマルタをいましめ、宗教的な説教を喜んで聞いたマリアの方が「なくてはならぬただ一つのもの」を選んだのだ、と讃めるのである。

これがイエス自身にさかのばる実話であるかどうかは別として、ルカ福音書の言わんとする趣旨は鮮明である。この話そのものも、またこの話を忠実に継承してきたキリスト教二千年の主流のイデオロギーも、家事労働を下等な作業として蔑視する視点を貫いている。家事労働は本当は人間の生存にとってなくてはならぬ基本的な労働なのだが、男支配の世界が作り出した文化は、その基本的な労働を女にのみ押しつけておきながら、それは価値の低い事柄であるとみなして、蔑視してきた。

こういう蔑視の仕方は、支配の方法としては最も露骨な方法である。抑圧する相手に重要な労働を押しつけながら、しかもその労働を奴隸的労働とみなして蔑視する。ここにあるのは二重の抑圧ないしは二重の搾取である。現実の社会関係において搾取し、更にイデオロギーにおいても搾取する。宗教はいつの時代でも、そのうちのイデオロギー的部門を担当してきた。——しかし、こういう直接的な二重搾取では、いつもうまく押さえつけておくことができる、というわけにはいかない。そこで時々、基本的な社会関係はそのままに、イデオロギーだけ半分裏返してごまかす操作が行なわれる。つまり、家事労働の露骨な蔑視を続けていたのでは女達が喜んで働くかなくなるから、逆に、これは立派な女の仕事です、と言って讃めそやす。だから女は喜んで「主婦」の座にとどまっていなさい、というわけだ。これが何故半分の裏返しかというと、すべての人間にとて重要な仕事です、とは言わずに、「女にとっては」という条件を付け加えているからである。「本当に」立派な仕事は女の仕事ではない、というわけだ。だからこの半分の裏返しは、本音のところでは、上記のルカ福音書の話をそのまま継承している。「本當になくてはならぬもの」は精神性、宗教性なのであって、台所仕事などは女子供のやるべきこと、という視点は継続する。

ここで重要なのは、半分裏返しのイデオロギーに出会った時にどうするか、という問題である。それについてここでは詳論できないが、結論だけ述べておく。確かに、男支配の社会秩序を維持しようとしている限り、その枠内で「やはり家事労働は重要なものです」などと言っても、それは性別役割分担の固定化をはからうとする男の側からの甘言にすぎまい。しかし、それがまやか

しのイデオロギーであるからと言って、では家事労働を蔑視しましょう、という地点に逆もどりしても仕方があるまい。むしろ、半分裏返されたら、全部裏返すことを要求すればいいのだ。家事労働は人間にとて基本的に重要な労働である、という認識は正しい。しかし、それが正しいとすれば、ならば男もそれを少なくとも半分以上は担ってみな、と主張すればいい。その主張が実現したあ까つきには、男の労働状況も生活状況も根本的に変化する。いや、それは、人類がまだ見たこともない、最も根源的な社会革命に連なるだろう。

話をもとにもどして、現代に生きようとする護教論は、ルカ福音書の話のままでは都合が悪いから、本当はマルタもキリストによって高く評価されるのです、などという「解釈」をつけ加える。その評価において護教論と私は近接する。しかし護教論は、これこそが聖書の原意です、と言ひ張るのだ。何故そういう改竄が護教論にとって必要なのか。宗教は決して不変不同の永遠の真理などではありえないのに、それを不変不動のものとして主張しようとするからである。しかし宗教はその時代その時代のイデオロギーの状況を映し出していく鏡にすぎない。もっとも、それは決してその時代の社会状況を正確に反映しているわけではない。それは正確な鏡ではなく、ゆがんだ鏡なのだ。それは多くの場合、その時代の現実ではなく、前時代の、あるいはもっと古い時代の現実をイデオロギー化して保存しようとする。宗教がしばしば典型的な時代遅れの姿を示すのはそのせいである。しかしあたそれは、宗教の中のかなり少数部分が示す行動であるが、その時代に新しく支配的になりはじめているイデオロギーを映し出すこともある。その場合でも、新しいイデオロギーを自ら作り出すわけではなく、人々が苦労して作り出して来た状況を、一回り遅れて反映しはじめるのである。鏡は千変万化する。何でも映すことができるからだ。しかし鏡に主体性があるわけではない。今、宗教界の一部が（残念ながらごく小さい一部にすぎないが）、女性解放に積極的に加担しはじめているのも、そういう現象の一つである。

今日発表なさったゴスマンさんは、キリスト教はもともとは女性差別的ではなかったのだが、父権的なヘレニズム時代に生き残るために、父権的な考え方を取り入れざるを得なかつたのだ、と述べられた。この種の言い方も護教論おなじみの言い方であるが、むろん、この発言の前半は間違っている。イエスとか（イエスはキリスト教ではなく、キリスト教以前であるが）、あるいは多少マルコ福音書のように、例外はあるものの、キリスト教の主流はその出発点からすでに根本的に女性差別的であった（ゴスマンさんのあまりにも間違いだらけの論述を一つ一つ指摘するのはこの場の仕事ではないのでやめておく）。けれども、ゴスマンさんの文の後半はそれなりに正しい。そして実際宗教というものはそのようにしてそれぞれの時代に百面相的に変化しつつ生き伸びてきた。封建時代には封建的支配を神の意志とみなして擁護し、帝国主義の時代には帝国主義の先兵となり、支配諸国の人々が植民地支配は当然だと思っていた時には、植民地支配のイデ

オロギーを狙い、人々が戦争と侵略にのめりこんだ時代には、戦争と侵略を美化する説教を語ってきた。それはすべて、個々の宗教がその時代に迎合して「生き残ろう」とした姿である。そして今、世界は、少なくとも女性解放についてはかなり前進してきているので、その世界に「生き残る」ためには、宗教はもともと女性解放の味方なのです、と言い立てる。

けれども、ほかの点は別として、この最後の点は、それで結構ではないか、と我々は言うべきだろうと思う。何故なら、宗教的護教論でさえも女性解放を口にしなければ生き残れないと思いはじめた、ということは、それだけ世の中全体として女性解放を目指す力が強くなつた証拠であるのだから 動機が何であれ、目指すところが同じならば、協力するのが正しい。ただし、事の順番ははっきりと知っておく必要がある。世の中に女性解放の流れが作り出されたから、宗教もその方向に向いてきたのであって、宗教がその流れを作り出したわけではない。だから我々は、宗教の位置づけをめぐって議論するよりも、女性解放の流れそのものをより大きく作り出すように努力すべきであろうと思われる。

以上、宗教的護教論による聖典の「解釈」をめぐって議論して来たが、まったく同じような「解釈」でも、近代以前においては、あるいは近代においても、大衆的宗教となると、話は違ってくる。キリスト教護教論的な限界にとどまっている女性論の中では最もすぐれているものの一つとして、エ・モルトマン・ヴェンデルの著作をあげることができるが（彼女は、上記のマルタとマリアの話に関して、まさに護教論的「解釈」をやらかしている）、彼女が紹介している中世末からルネサンスにかけてのマルタ伝説が面白い。ルカ福音書にもかかわらず、キリスト教中世においては、マルタは聖女として崇拜されるにいたった。しかもそのマルタ像は、実践的で力に満ちている。しかし、これが「キリスト教本来」の視点である、というわけにはいくまい。むしろ、私が思うに、キリスト教正統の教義では覆い隠すことのできなかつた大衆の生活の真実が、こういう形の伝説となって庶民の信仰の中に頭をもたげてきた、ということであろう。女性の生活する力を、いつまでも蔑視したままで押さえつけておくことはできなかつた、という一つの証拠がここにある。してみれば、これは、宗教信仰がそのような伝説を生み出したのではなく、女性の生活する力が宗教的伝説の中にも反映されている、ということであろう。古い時代において、大衆は自分達の意識を表現するのに、宗教的表現以外の表現方法を知らなかつた。表現する、ということは、宗教行為以外にありえなかつたからである。だから、宗教的支配が女性差別を基調として保っている社会においても、女性達の生きた力を表現するには宗教伝説に頼らざるを得なかつた。そうであつてみれば、我々はそれを宗教そのものの根源的な力などと見誤るわけにはいかない。我々自身はもはや、すべてを宗教的にしか表現できない、などという時代には生きていなき。無理に宗教的に屈折して表現しなくとも、現実の女性解放を女性解放の現実としてそのまま

主張することができる時代に生きている。

最後に、宗教そのものについての私の見解は、すでに最近の著作その他で多く展開してきたので、ここではくり返さない。結論的なことだけ言っておくと、宗教は分業の産物である。人類の歴史において現れた最も根本的でかつ不幸な分業は、精神的労働と肉体的労働の分業であった。その上に立って、最上位の精神性に関わるものとして宗教が独特の存在領域を獲得することができたのである。そして、この分業が人類の歴史社会の中に、支配する者とされる者、抑圧する者とされる者の分裂を生み出してきた。性差別はその分裂の最も根源的な現れであったと言つてよい。ともすれば、我々が性別分業を克服する方向で女性の解放を主張する時に、根源的分業の象徴である宗教に回帰することはありえないはずである。女の解放は同時に男の解放であって、全体としての人間の解放、人間の全体的解放である。むろん私は、現代社会において分業の社会体制が一挙に転倒される、などという夢のようなことを考えているわけではない。しかし、人間の全体的解放に向かって一步踏み出そうという者が、分業の象徴たる宗教を人間の根本原理として信奉することなどありえない、ということとははっきりさせておかなければならぬ。女性の解放は、その意味での宗教の否定的克服の課題を内包する。

宗教は一方では上位（極度の抽象性）の精神性としてあるので、宗教界の上層部は常に男支配を代表してきたけれども、同時に、極度の抽象性は「抑圧された者の溜息」を溜息としてのみ抽象して表現する。とすれば、「女の方が男よりも宗教的である」というようなことは、「女らしさの神話」の一つの表現にすぎまいと思われる。あるいはまた、男の宗教を転倒して女の宗教を作ろう、などという試みも、不毛な努力であろう、と思われる。男支配の社会が宗教を生み出した。そうだとすれば、女の解放は、宗教などの助けを借りなくともすべての人間が明るく、のびのびと、力に満ちて生きることのできる社会を生み出すことである。

（追記。この発表は他のお二人の発表の内容がはじめからおのずと想像できたので、それに対応するものとして準備しました。しかし、本来、女性学会の発表としては、この文の最後の二つの段落を出発点として、その先を展開すべきであったかと反省しております。本文に言及した二人の著作のうち、日本語訳があるのは、次のものです。

M. Daly, The Church and the Second Sex, with a new introduction, Harper & Row, 1975 (『教会と第二の性』未来社)

E. Moltmann-Wendel, Ein eigener Mensch werden : Frauen um Jesus, Gütersloh, 1980 (『イエスをめぐる女性たち』新教出版社)

女性の視点で仏教を考える

源 淳子

仏教の歴史は、釈尊の悟り（成仏）の体験から今日まで2500年以上になる。日本へ伝来してからでも1400年の歴史をもっている。その国、その時代に自らに変化し、時には体制に順応し、差別に加担し、時には人々の救いになり、様々な形をとりつつ、今日まで一応仏教の名をもちながら日本に存続している。

女性の視点から仏教をみていくことは、仏教が女性解放にどのようなことをしてきたか、そして、今後、もし女性解放に仏教が果たす役割があるとするなら、それはどういう点であろうか。という問題になるだろう。前者については、仏教は女性を差別する体制にのっかかり、業の問題にすりかえ、女性の不淨性を説き、女性を抑圧する方向に動いた。家父長制を支持し、救われない対象に女性は置かれた。その女性達が信仰すれば救われるという論理で、女性の信仰者を多くつくった。表面上は男性の論理で支配される仏教体制を、女性の信仰という裏面上の力で仏教は存続してきた。

仏教体制のからくりにも気付かない、あるいは気付かされない多くの女性は魂の救いを仏教に求め、この世を厭い、あの世を願って心の平安を得た。（仏教そのものは決してあの世の問題ではないはずであるが……。）体制肯定になることも知らなかった女性ではあるが、心の平安を得ることによって、抑圧されている現状を肯定しつつ、あの世での解放を信じる形で、自己解放が成り立っていたことも事実である。そして、現在でもなお心の平安を仏教に求める人々はあとを絶たない。また、形式的にはあれ、仏教との縁をもっている人、これからもつであろう人もそう簡単にはなくならない。自己の取捨ではなく、家の宗教として仏教に関わっていく日本の仏教の体質にも問題はある。仏教だけではなく、様々な宗教に関わって生きる現在の日本人を否定して、仏教は体制に順応し、差別に加担してきたから必要ないの一語でかたづけることは短絡的である。多くの日本人の中に何らかの形で生きている仏教の姿をぬきにしては女性解放の問題も語れないだろうと思う。

仏教伝来によって悪因をつくったのは、日本の仏教が中国仏教を受け、国家・貴族と結びついたということであろう。選ばれた人しか救われない仏教として日本の仏教が始まったのである。つまり、原理としての仏教の受け入れが希薄であった。すでに女性差別を含んでいた仏教を何の疑いもなく受け入れていった。例えば、女人五障説（女性には五つの障りがあって、その中の一

つには、（女性は仏になれないと説く）、变成男子の思想（女性は一度仏性にならねば仏に成れない）は、すんなり日本化してしまった。

そして、教団（組織）の形成である。教えが教団を通して伝わるという利点はあるものの、形式仏教だけが増長され、教団を形成する僧侶自身が本来の僧侶とはかけ離れ、集団を維持することになってしまう。また、家の宗教と化した仏教（檀家制）に個人の選択がないから、個の問題として仏教を考えることができなくなっている。教団に伴う様々な問題、例えば、門主制（これはミニ天皇制。宗教法人である寺院は名ばかりで、私有化の方向へ）など、大きな問題を孕みすぎて、少々の改革では変わりようがない。仏教がこのような体制の中で生きていることが、どれだけ罪悪であるか気付いている人は少ない。実際に気付いたとしても、何から変えていけばいいのかわからないというのが素直な気持ちではないだろうか。自分の足元をみないで、他を批判しても何も変わりはしない。特に、仏教内部の人、教団人を自認する人達の自覚はあまりにもおそまつである。

弁解がましいが、私自身も教団人の一人である。寺院には常住していないが、住職の妻として坊守と呼ばれる立場にいる。教団の中にいて、仏教のいいところを見つけることは困難である。しかし、何をどう変えていいのか、正直なところ見当がつかない。あまりにも敵は大きくて歯が立たない。選んで子供を産まなかった私は、世襲制がくずれる（あとづきがいなくて困る）という理由も含めて、坊守として娘として不適格者扱いされている。

こんな仏教体制の中で、何故、今だに仏教にこだわって私が生きるのかというのは、原理としての仏教に魅力を感じ、解放の問題に思想として何か役立つのではないかと考えるからである。原理としての仏教を学べば学ぶほど、私は現実に働いてきた仏教に失望し、如何に原理としての仏教が民衆の教えになることが難しかったかを痛感せざるを得ない。民衆の教えとして浸透しなかった点に問題が残るのであるが、私は原理としての仏教に、そして、その教えを歩んできた人に興味を持ち、仏教から離れることができない。

では、原理としての仏教は何を教えているのだろうか。仏教はもともと一切の生きとし生けるものが仏に成ることができると説く。それは生きとし生けるものが仏（如来）になる可能性をもっていることである。それを如来藏といい、もとのサンスクリット語で示すと、tathagatagarbhaである。tathagataが如来であって、garbhaが藏と漢訳されている。garbhaはもともと「子宮」「胎児」という二つの意味がある。このことばから考えると、成仏しようと望むものは本性上、女性でなくてはならないということになる。また、空思想についても、一切のものが实体をもっていないと説くのであるから、男も女も当然空ということになり、両者の間に何の区別もなく、あらゆるもののが実体がないという点で、平等であると説く。これらの点から考えると、

女性が仏に成れないとか、一度男性にならないと成仏できないという思想が出現したのは大変な誤りである。しかし、仏教の軽視的大勢も、社会体制にのっかってしまったため、女性差別の方向へ動いてしまった。

次に、仏に成るということはどういうことであろうか。それは、自己中心性（我執）を離れ、他を差別せず、智慧と慈悲を備えることをいう。智慧とは主観・客観という二元論的思考法を超越した智をいい、慈悲とははんとうに相手の立場にたつ情愛をいう。逆にいえば、人間とは自己中心的であり、他人差別し、智慧と慈悲をもたない存在であることを教える。

智慧と慈悲を得るために、人間がもっている他の差別する心をなくすことを勧める。他を差別する心を分別（vikalpa）といい、自と他を分けることをいい、それが執着であり、迷いであると説く。だから vikalpa の否定が迷いの世界を脱することになり、智慧と慈悲を備えることに通じるのである。

ところで、現代は文化的危機状況といわれ、二元論的思考法の行き詰まりが、男性からも出されている。これまで、文化一自然、理性一感性、知性一肉体、男性一女性というような二元的思考法で二者を分断し、優劣関係としてみるような考察がなされてきた。この思考法の反省が男性から出ていることは意義あることだと思うし、実際に、こうした考え方の転換の必要性は必至だと思われる。そこで、新しい構築をめざすにあたって、二元論的思考を否定する原理としての仏教が見直されることは意味があり、その構築に大いに役立つのではないかと考える。

例えば、文化一自然の関係をみると、これまでの社会の思想・動きとも文化優先であり、文化的向上をもって、人間の生活は豊かになり、科学の進歩と相まって合理化された生活を良しとし、自然が破壊されることへの危機感は希薄であった。我々の周囲はものであふれ、一年中出回る野菜に季節感もなく、子供達は、きゅうりやトマトが夏野菜であることを知らない。また、あふれているものは決していいものばかりではなく、不自然な形でつくられたものが多い。また、緑の多い山は切りくずされ、ハイウェイが作られ、車によって便利に移動することができる。この合理化・便利さを今さら否定する人はいない。文化の豊かさを逆もどりの方向へ考える人はいない。しかし、そういう状況の中で、自然が見直されつつある。文化を否定する形ではなく、文化と共生しあう自然の大切さを改めて考えるとき、文化と自然の両者が成り立ちうるにはどう考えていったらいいのか、大きな課題である。

また、自己一他者の関係も同じことである。自己の主張のみ優位に語られる時代は終わりにしたい。自己の解放のみでは完全な解放は成立しない。他者の解放が成立してはじめて自他共に解放されるのである。男性一女性についても同じことである。

こうした関係に、仏教の思想を取り入れることが必要となってくるのではないだろうか。人間

が如何に二元論的思考を超えることが困難であるかを仏教は教えてきた。人間・存在の基本的あり方は、もともと自己中心的であり、自己中心的にしか生きられないことを説いてきた。人間は差別を生み出す原因を自身の中にもっているのである。私が差別されていると意識するとき、それは又、私がどこかで何かを差別しているのである。

現実に変えていかねばならぬ差別の問題は多い。特に、女性差別について私が語るとき、私は同じ女性を差別していることがあるかもしれない。差別する心が私の中にあることを自覚しながら、差別の問題の解放を考えていきたい。原理としての仏教は、差別問題を考える上に、人間の意識・思考法の問題として、何らかの役割を果たすことができるのではないかと思う。

6月16日に開催されたシンポジウム「女性と宗教」発表要旨

おことわり：エリガベート・ゴスマンさんの原稿は、ローマ字（英語・独語を含む）のため、亀山が一部を除き日本字に直して掲載しました。

女性と宗教・両性具有あれこれ

浅野 美和子

6月16日の「女性と宗教」そして17日の「両性具有」の分科会は、私の問題関心にぴったりで、充分な知的刺戟を与えられた。討論に加わるなかで、私はこれまで自分の中に貯えて来たものが次々に誘い出されるのを留めることができなかった。

宗教についての私の基本的態度は、合理的精神よりも靈感の重んじられた前近代において、生の不条理、社会の不条理を悩み苦しむ靈能者が、そこから自己と他者を救い解放しようとして創唱し、歴史的に体系づけられていった仮説であると思っている。現代の社会問題－女性問題の多くがこの領域にある－を解決するためには、なるべく合理的でなければならないが、人間存在の根元すなわち生の不条理、いのちの有限、自然としての人間ということから目を背けないならばすべてが合理主義で解決できるものでもない。この世界で人間が理解できているものは一部であるし、科学もまた仮説の体系である。だから私はその未知の部分を宗教に委ねようとする人々を理解することができるし、過去において宗教の積み上げて來た思想は偉大であると思う。ただどの宗教も、男権的文明の俗的支配者と一体化したとき、民衆を抑圧し女性を差別するイデオロギーとなつたのだろう。

このような観点からみて、3人の発表はそれぞれに面白かった。

ゴスマンさんの、聖書をフェミニズムの立場から読みなおす、という作業は、聖書についてほとんど無智な私にも興味ぶかいものであった。たとえそれが田川さんが言われたように、「キリスト教が生き残るため」であったとしても、現にキリスト教信者の方が非信者より多数であるというヨーロッパの現実のなかでは、女性解放のひとつの筋道となるだろう。

「食って寝る」ことが人生の最重要事とされる田川さんの御意見には、字義通りには賛成だが、氏の著書を読んでいないせいか、もうひとつよく分らなかった。「食う」ことも「寝る」ことも人間の自然に属することである以上、自然のもつ不条理に目をつぶることができるだろうか。
「飢」は社会科学的に解決できる。しかし源さんが指摘されたような「生き物を殺して食べる」とへのいたみ一田川さんは他人を殺すと誤解されたようだーを仏教は教えている。これを忘れたとき、限りない自然破壊につながるので。からだの中に自然のリズムをより多くもつ女性は、自然破壊に堪えられない。仏教でいう四苦一生老病死を自然科学や社会科学は根本的に解決する

だろうか。宗教はこれらの苦の自然的な面の不条理を人生の中に受け入れて生きる知恵を教えるものではないだろうか。最近の心療医学では、現代生活のもたらすストレスから受ける心身的ダメージを、宗教的に（特定の宗教でなく）治療しようとすると聞く。女性が女性特有の、言いかえれば女性問題的な心身症状を病むとき、治療者はフェミニストの立場に立ち、女性の身体性、身体のもつ自然のリズムと不条理を受け入れる方向で治療することが必要ではないだろうか。それを宗教的と呼ぶかどうかは別として。このような意味での「宗教」は、女性解放にとって必要なものでこそあれ、有害なものではないと思う。かくいう私自身はどのような特定宗教とも「縁」がなく、今後もないだろうけれど。

田川さんはおそらく、上のようなこととは別に、過去の既成宗教が女性差別に犯して来た罪を告発されるのだろう。そしてその文脈の中での女性解放などあり得ないとされるのではないだろうか。私の勝手な思い込みかも知れないが。

次に考えるべきことは、過去の宗教の中で女性がそれにどう関わり、自己確立をしようとしたか、また宗教がそれにどう答えようとしたか（仏教用語では女人救済という）を問い合わせ、かつ評価することである。女性学の今後の課題のひとつである。

源さんの発表は、右のような私の关心とは必ずしも一致しなかったが、もっとも興味を持って聴いた。私は浅学でかつ一部分しか知らないので、親鸞に関する点しかコメントできないが、いわゆる“女犯の夢告”は、従来の仏教が人間の自然性をタナトスの方向からしか受け入れなかつたのに対し、エロスの方向から受け入れようとしたものだと理解する。しかし妻を観音の化身と観じた親鸞も、「弥陀の名願によらざれば、百千万劫すぐれども、いつつのさはりはなれねば、女身をいかで転すべき」などと变成男子説を出られなかった。しかし一方で親鸞はこうも言う。「親鸞は父母の孝養のためとて一返にても念佛まうしたこと、いまたさふらはず。そのゆへは一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり」と。無限の宇宙の輪廻の環の中では、生あるものは皆平等に生れ替るのだという。これは無量寿經の第十八願（淨土を信ずる衆生が往生を怠すれば救うというアミダの誓い）や、第三十五願（往生を願う女性がその身を厭うたならば再び女身に生れさせないという誓い）からは出て來ない論理である。私度僧一沙弥の系譜をもつ民衆仏教の思想につながるものではないだろうか。この系譜をたどれば一遍も「曇業多生の間には、父母にあらざる者もなし……此身をやどす其程は、あるじも我も同じこと、終にうち捨てゆかんには、あるじがほして何かせん」と同じようなことを説く。『沙石集』を編した無住も、同様の存在論的平等觀にたつ説話を収めている。これらの仏教者に共通する点は、権力の座に遠く、民衆の化導に生きたことであり、民衆の意識につながると共に「一切ノ男子ハコレワカチチナリ。一切

ノ女人ハコレワカハナリ」と説く梵網經などの、存在に基づく平等を強調する点で一致している。

いわば万物一体思想で、この世では男女の区別も差別もなくなるのである。

しかし権力に近づき権力そのものになろうとした宗派では、仏教本来の女性観である五障説が強調され、一切の仏に見離された不淨な女性を救うには、变成男子の論理しかなかった。そのような女性観に対応して、血の池地獄に落ちた女を救う“地獄の仏”である地藏や八幡の菩薩信仰が行なわれた、近世に大いに巾をきかせたのが、これら仏神による、存在差別を前提とする女人救済であった。「摄取不捨」といって救う側の平等性は、念佛系宗派では保証されたが、「存在の平等観」は、教団の教説からは影をひそめてしまう。素人流の読み方ではあるが、聖書にならって仏典の読みなおしもまた必要ではなかろうか。

このような仏教に早くから習合して来たのが、民間信仰としての「神道」である。母系的要素の強い日本の古代社会の生み出した信仰は、初めから両性具有であり、権力の内部でさえそうであった。天照太神とスサノヲ姉弟は、両神とも両性的性格を有し、相交わることなくウケヒによってそれぞれに子を産むのである。国つ神たちが姫彦制という男女両性による統治を行なっていたという神話は、考古学において、地方首長墳に男女が並んで全く同じ様に、つまり“女が宗教、男が政治”という区別なく、両者とも同様の呪具と武具を身につけた姿で発掘されたという事実に裏づけられる。古墳時代中期までの地方社会では、男女それぞれに両性具有的性格が期待されていた、換言すれば首長層に関する限り男女役割分担はなかったといえよう。

仏教が日本に入ったとき、最初に僧籍に入ったのは二人の女性であったし、その後も多数の女性が尼となった。彼女らは実は巫女だという説もあり、このとき神仏習合はすでに始まっていたかも知れない。

中世末期の唱導文芸、つまり漂泊の巫女たちが語り歩いた寺社縁起の世界では、神は仏の使者となるが、仏教は神道のというより歩き巫女たちの女性観をとり入れて、「淨不淨をきらわす」産褥の女をも神は守護するということになる。（しかし支配者の内では触穢思想が極度に発達し、差別の源泉となる）このように仏教と結びついた神道が民間の底流をかいくぐって、江戸時代の中期から女性尊重をかけて登場していく。

「男の中に女、女の中に男あり」と唱え、無神論のよそおいをもつ安藤昌益、「たわやめぶり」をよしとする本居宣長、「姫の社、彦の社」を提唱する加茂規清、「男女一雙にして高下尊卑なし」と説き恋愛を讃美する増穂残口らを序章とすれば、富士講、如来教、大本教、金光教などの民衆宗教は、教養体系を整え、多数の信者を獲得する中で、女性尊重、両性具有の論理（金光教は前者のみ）はそれぞれの教義の中核的意味をもった。

富士講中興の祖食行身禄の娘花は「十六木」つまり人間を「八木」=米の化身と捉え、男女両性を身の内に備える巫女だという認識であった。性交を「おまつりごと」とたたえ、今の世は陽=天が勝ちすぎてうまくいかないから、陰=大地を盛んにすべきだといい、性交方式から生活様式、態度すべて男女逆に行うという「おふりかわり」を説いた。

仏教的色彩の濃い如来教は、教祖きのが男性神金毘羅を憑依させることにより両性具有となる。前の世、胎内は男であったが、如来の恩召により布教しやすい女の形に生れたと説く。そして親鸞・一遍と同じ存在平等論、幾度も生れ替る経めぐりの中では男も女もなく仮の姿だと説く。これと矛盾するが女の祖を八幡さまだと言い、それ故女性は尊く、如来は女性を差別せず成仏させると説く。（八幡信仰は日本の聖母信仰の最たるものだった。）

大本教はこのような両性具有者二人の組合せで成り立つ。教祖出口なおは変性男子=艮の金神^{うじとうら}で、その協力者王仁三郎は変性女子=坤の金神であるとし、この両神で経糸緯糸の匠^{ひつじさる}^{しづか}をすれば、世の中立派な錦のみ旗となるという。

金光教の男性教祖金光大神は、とくに両性具有觀ではなく、「女は神に近い、信心は女から」といって女の不淨を否定する。

以上大ざっぱに述べた江戸中期以降の民衆宗教の女性尊重は、如来教を除きいずれも女性が母性である限りにおいてのもので、母性尊重により家が栄え、稻がよく実り世の中うまく行くという農業社会の思考であって、母性を含めた人間としての女という思考は未熟であった。修驗道のように、山全体を胎蔵界マンダラすなわち仏の母胎に喻え、その中で修行しながら、女人禁制の結界とする場合もあった。（しかし修驗道に女性蔑視はない）

そして教祖だけは両性を具有することにより、完全な人間=神になりうると考えるのである。如来教だけは女性を母ととらえるのではなく、成仏の資格がありまた世の役に立つと抽象的に述べるだけで、家や生産の倫理がなく捨世的である点が他と異っている。

両性具有という考え方が現代人の行動や内面をどう意味づけるか、女性解放にどう役立つかは私にはまだ分らない。

昌益は「男女にして一人なり」と言っている。これは対の思想である。もし両性具有が対の思想を意味するならば、役割分担につながり、女性解放のためには具合の悪いことになろう。

しかし歴史上の宗教思想と女性との関りを分析するには、きわめて便利なメガネである。何しろ神道思想とは、ユング派でいうところの道教の流れをくむものにはかならないからである。

◎ 寄贈図書資料

- 講座女性学 1. 女のイメージ, 女性学研究会編, 効革書房, 女性学研究会
- 同 2. 女たちのいま " "
- 婦人情報センターだより, №17, 東京都婦人情報センター
- VOICE OF WOMEN, №52, 日本女性学研究会
- OECD・CERI家庭教育セミナー報告書, 1983年10月25日(火)～27日(木),
　　国立婦人教育会館
- 家事労働, 日本女性学研究会 1983年サマーセミナープロジェクトチーム
- 東京強姦救援センターニュース第2号, 東京・強姦救援センター
- 月刊婦人展望, '84, 6. 7, 市川房枝記念会

◎ 新入会員紹介

河出三枝子 テレビ・ディレクター, 高校教員を経て岡崎女子短大教員
主な関心事 母性の構造と文化, 労働権認識の形成過程

◎ お知らせ

東京・強姦救援センターより

RCCニュースの購読をして下さる賛助会員を募集しています。年3回, 2000円
Tシャツ(1700円), 便箋セット(500円), ステッカー(2枚1組, 100円)

財団法人沖縄協会より

昭和59年度(第6回)沖縄研究奨励賞の候補者推せんに関する応募用紙が送付されております。
本会からの推せんを受けられたい方は、事務局へ御一報下さい。

沖縄研究奨励賞規定(抜萃)

- 奨励賞は沖縄を対象とした自然科学、社会科学、人文科学の研究の中から、将来性豊かなすぐれた研究を行っている新進研究者(またはグループ)2名に贈る。

- 本奨励賞の推薦は毎年9月末日に締切り、12月に当該年度の受贈者を決定、発表し、翌年1月贈呈式を行なう。
- 本奨励賞として賞状、記念品ならびに副賞として研究助成金50万円を贈るものとする。

編集後記

真夏の炎天下、乾ききった街を、臨時の幹事会の開かれる法政大学へと急ぎました。市ヶ谷の駅から約10分間、川沿いの土手の並木道はさながら緑のトンネルのようで、しばし心にうるおいを取戻させてくれます。

幹事改選に関して、規定が作成されました。現在、幹事会は、経済的にも時間的にもほとんど手弁当に近い状態で運営されています。やる気のある方、本会の将来を考えて下さる方が次期の幹事として、多勢出て下さることを期待します。

猛暑のあと、お疲れが出ませんように、御自愛のほどを。

(亀山)

学会ニュースでは、常時、皆様からの御意見レポート等を受け付けておりますので、御投稿下さい。なお、原稿はお返ししませんので、必要な方は、コピーをおとり下さい。

発行 日本女性学会

〒103 東京都中央区日本橋2丁目2番1号

呉服橋共同ビル2F ワールド・カルチャー・サービス内

電話 03-274-1791

郵便振替口座 東京 8-49189